

HEADTOME 本体で行える処理はほとんど可能である。開発の経緯と本システムの有用性、および問題点について報告し、手軽な PACS の一方法としての評価についても考察を加えた。

25. SPECT 画像の定量性についての検討

加藤千恵次 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正従

(北大・核)

^{99m}Tc を用いてファントム実験を行い、SPECT 画像の定量性についての検討をした。収集時間、フィルタを変えた再構成像を比較検討し、以下の結論を得た。SPECT 画像のカウントはプロジェクションデータのカウントと定量的な関係はない。同一のプロジェクションデータから再構成される像でも処理の方法でカウントが大きく異なる場合があり得る。収集時間の長いプロジェクションデータを用いる場合ほど定量性を保つためには半減期による減衰の補正が必要である。ウィナーフィルタを用いた再構成像の相対的な定量性はスムージングフィルタを用いた像と比べ良好である。ウィナーフィルタを用いた場合は散乱線による低周波雑音が減衰しているため吸収係数を大きく設定する必要がある。

26. RI 検査データベースを利用した北大病院における検査内容の推移

鈴木幸太郎 久保 直樹 荒井 博史
表 英彦 高橋 典子 勝浦 秀則

(北大・放部)

鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古館 正従

(同・核)

われわれは昭和 58 年より自作プログラムによる RI 検査データベースを利用しているが、これから得られたデータをもとに検査内容の推移、検査データベースの利用に関し、若干の検討を加えたので報告した。検査件数は増加傾向にあり、特に SPECT 検査が多くなってきた。そのうち、心筋、腎、肝で顕著である。また、全検査の中で、骨、 ^{67}Ga 等の全身検索が検査件数の多くを占めている。データベースについては入力方法などに関する検討の必要がある。